



中国語標準語声調の知覚研究—中国語母語話者と日本人中国語学習者を対象として—

呉, 琪

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7966号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007966>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文の要約

中国語標準語声調の知覚研究

—中国語母語話者と日本人中国語学習者を対象として—

令和 3 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

呉 琪

外国語を母語とする中国語学習者が中国語を習得する際に、必要な学習項目として、発音・語彙・文法・会話などが挙げられる。その中でも発音は入門期の基礎であると同時に、最も難易度の高い要素の一つであると言われている。中国語の発音には、声母・韻母・声調という3要素があり、特に、声調（音節内部における音の高低と上がり下がり）の習得は、学習者が最初に困難を感じやすい課題である。

従来の研究では、中国語学習者の声調の誤用パターンの調査や、学習者と中国語母語話者の声調の音響的特徴の比較など、生成面を中心としたものが主流であった。しかしながら、学習者及び母語話者の声調に対する知覚の相違を調査する知覚面の研究は数が少ないうえ、刺激音や研究手法の相違によって異なる結果が報告されている。

そこで、本研究では、レジスターと音節の持続時間という二つの要素を実験に取り入れ、母語話者と学習者の声調知覚を調査した。具体的には、まず、中国語母語話者の Tone1-Tone2, Tone1-Tone4 の知覚的特徴を明らかにした。次に、日本語を母語とする中国語学習者の声調知覚を調査し、母語話者との相違を比較した。さらに、学習歴が中国語の声調知覚に及ぼす影響についても検討した。最後に、日本人中国語学習者を対象とする声調指導法の提案を試みた。

本論文は9章から構成されている。

第1章では、本論文の位置づけと研究背景を概観した。

第2章では、先行研究を整理した上で、その問題点を挙げ、本研究の目的を明確にした。

第3章では、母語話者を調査対象とした声調知覚実験の予備実験（実験1）を行った上、予備実験で見つかった問題点を整理し、改善方法を提示した。

第4章では、まず、「レジスター」という抽象的な概念を定量化し、レジスターの範囲を生成実験（実験2）によって測定し、その結果を根拠にして高・中・低レジスターとその f_0 の範囲を決めた。その上で、母語話者の声調知覚実験の本実験（実験3）を実施した。本実験では、レジスターと音節の持続時間を考慮した上で新たな刺激連続体を作成し、声調判断テストを設け、レジスターと音節の持続時間と母語話者の声調知覚の関係を調査した。その結果、レジスターと音節の持続時間は両方とも母語話者の声調知覚に影響を及ぼすこと、また、レジスターが低いほど、Tone2 の知覚に必要な上昇幅は狭くなり、Tone2 が知覚しやすくなること、音節の持続時間が短いほど、Tone2 または Tone4 と知覚されるための f_0 変化幅が狭くなること、さらに、母語話者にとって、Tone4 に知覚されるための下降幅（3st 以上）は Tone2 の必要な上昇幅（2st 以上）より広いこと、等を明らかにした。

第5章と第6章では、学習者を調査対象とした声調知覚実験の予備実験（実験4）と本実験（実験5）を行い、レジスターと音節の持続時間と学習者の声調知覚の関係について検証した。その結果、レジスターは音節の持続時間より学習者の声調知覚に及ぼす影響が大きいこと、レジスターが高いほど、Tone4 の知覚に必要な下降幅は狭くなり、Tone4 が知覚しやすくなることや、レジスターが低くなると、学習者の声調知覚が難しくなり、Tone3 への誤聴が顕著になること、等を明らかにした。

第7章では、母語、レジスターと音節の持続時間の影響、さらにこの3者の関係から母語話者と学習者の声調知覚を比較した。その結果、母語話者は Tone1-Tone2, Tone1-Tone4 に対する知覚はカテゴリー知覚であるが、学習者は母語話者のような知覚カテゴリーを完全には把握することができていないことが判明した。また、レジスターは母語話者より学習者の声調知覚に与える影響が顕著である。母語話者は低レジスターでのみ、下降調の刺激音を低い比率で Tone3 に知覚したが、学習者の場合は下降調と上昇調を問わず、 f_0 が低ければ、高い比率で Tone3 に知覚した。この事実から、Tone3 を知覚する際に、母語話者は調形と f_0 の高さの両方を手掛かりにしているのに対して、学習者は f_0 の低さを重視するあまり、調形をおろそかにしている可能性が示唆された。

第8章では、学習歴によってグループに分け、学習歴が声調の知覚に与える影響について検討した。学習歴が長いほど、声調の知覚が母語話者の結果に近かった。また、声調の知覚において、Tone1・Tone2・Tone4 の習得は学習歴が長くなるにつれて上達するが、Tone3 の習得は上達しにくい。さらに、学習歴が短いほど、レジスターの影響を受けやすく、刺激音を Tone3 に誤聴する傾向が強いことが明らかとなった。

第9章では、本論文の実験結果について全体的なまとめと考察を行った。さらに、研究の結果から得られた知見に基づいて中国語教育への提言を試みた。